



海  
峽  
叢  
書

四

9
4084
4





門口  
號4084  
卷 4

吾文書

卷八

一

三

四



人而無孝者

不異於畜生

ひらしてこうもそのち

やうにことあうび

昭和十六年一月十一日寄  
厄野貴美氏贈

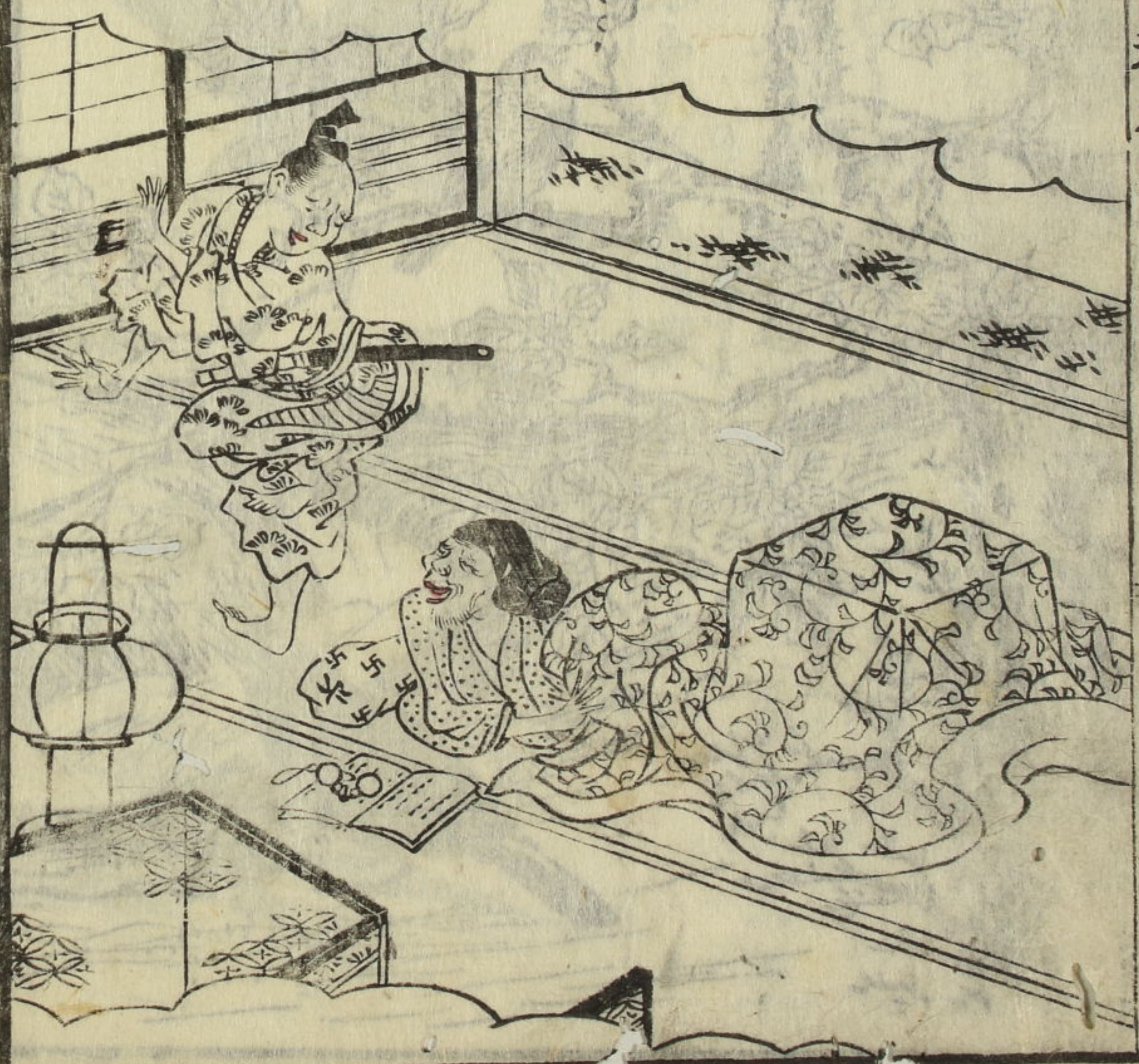


畜生といふ禽獣のこころひあり親に仕て孝なれば人の形にむまれぬれども人の心なく異ことなりといはれぬる怪ありその禽獣の中にも雄の親をのぶる枝より三枝引く下より親をぶる乃後をそと高を老ふ親鳥に人食を哺て養育の恩をかえはるや珠に孝なれば人の禽獣におもひ





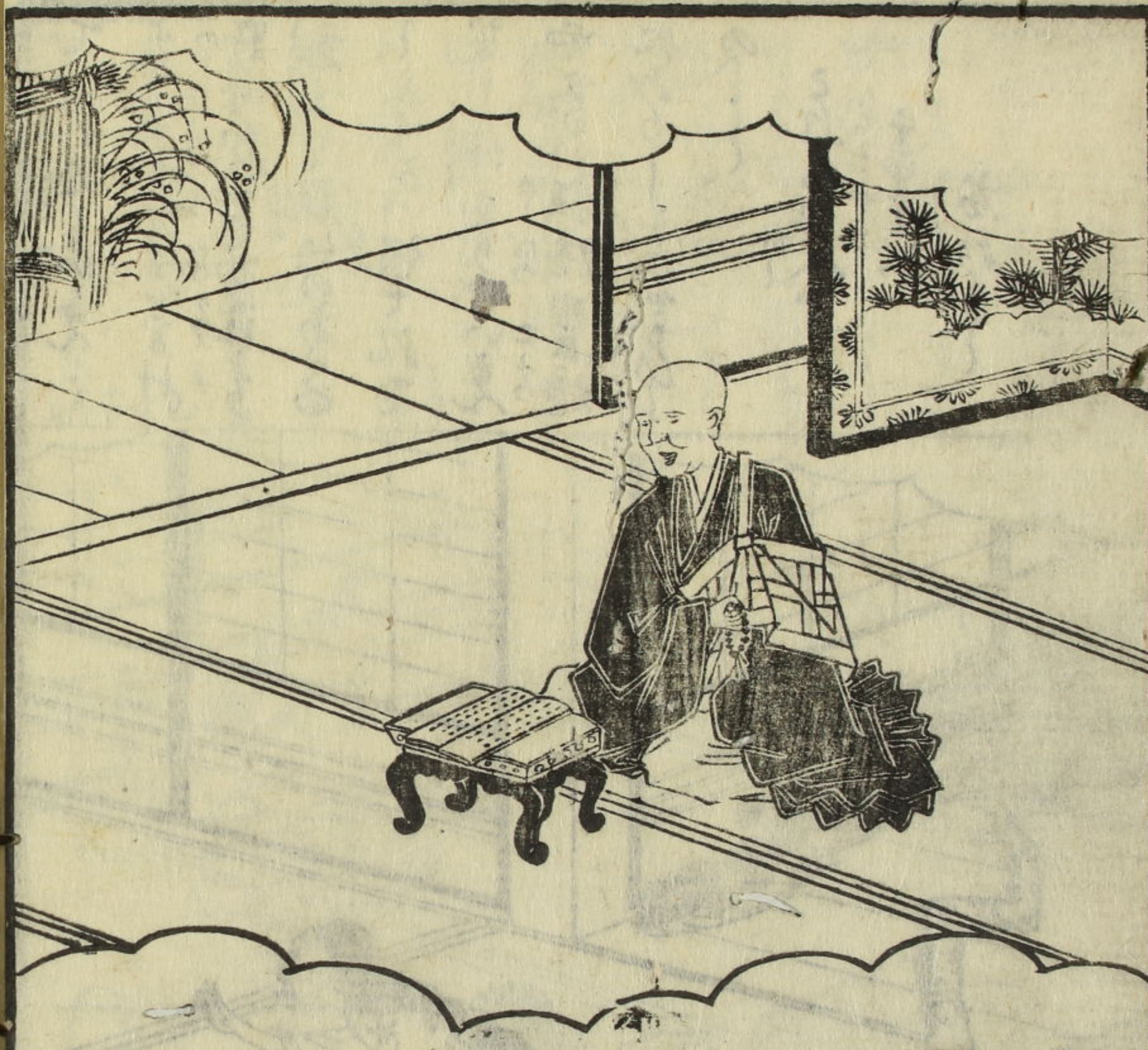
古にむうし世に親に  
 巨魁に假寐せし息  
 男の側を引ゆる  
 親の尻を蹴ちりし  
 けるうき顔たる顔も  
 けて心は付へくし  
 りひて追きぬまの三  
 涙を流して親子  
 ほどよんごうちあま  
 このいあしきも強  
 悪なる憐れをよこ  
 すま八人までありき  
 よもあはれをきてれ  
 をあして追まの八  
 人



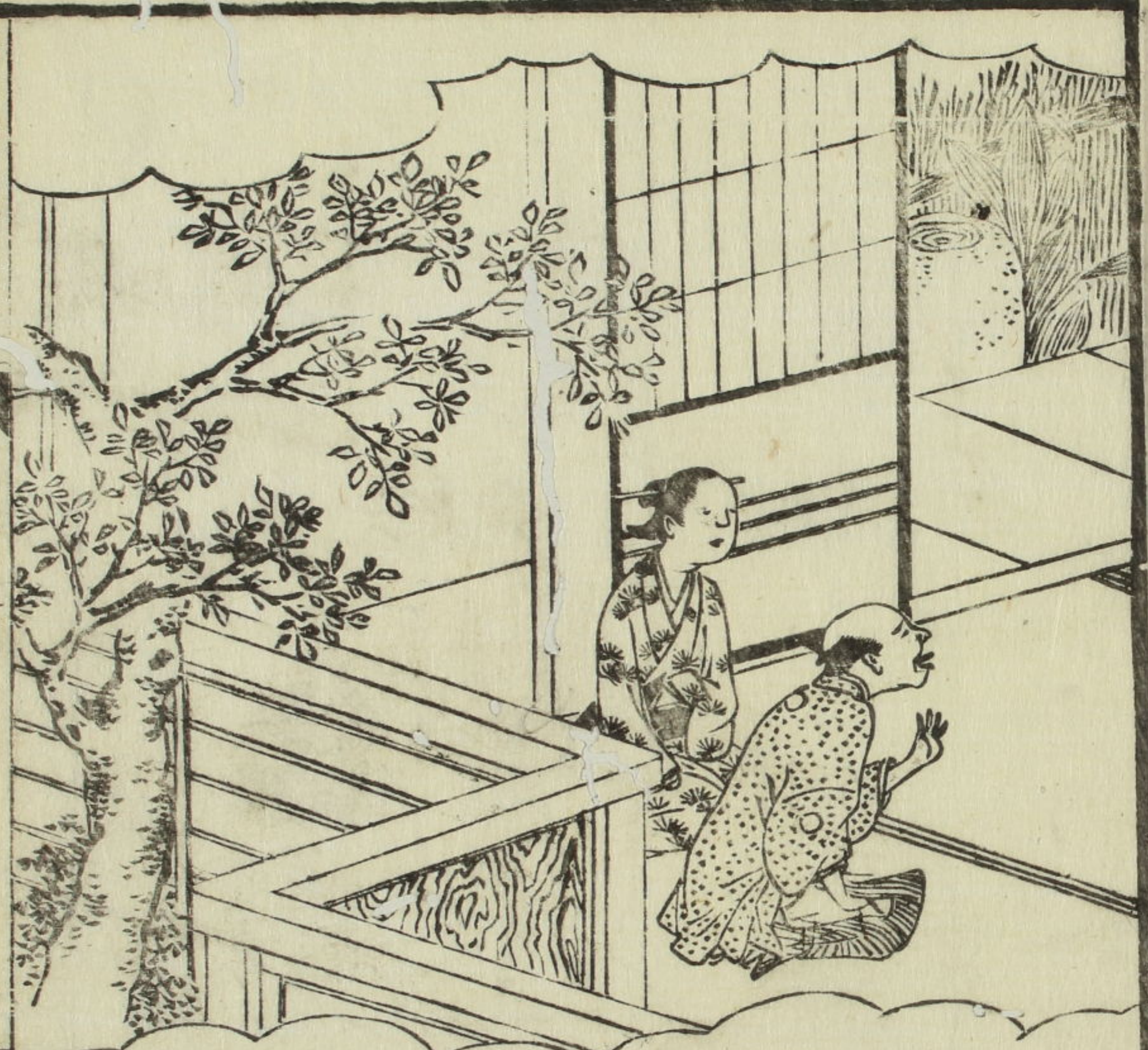
ておのれも山まんと  
 するこころれんをせうれ  
 の野所むすこお落し  
 立まて親にのあまは  
 とあり子ハ何それ  
 ちし舞よりせい見  
 やあハ飯捲の巨魁  
 にありしとあまの  
 のし  
 こゝろの人を  
 ままに  
 方ねりし  
 い







不交三與子交  
 何遊七免舟  
 不乘四等船  
 隨波八古油  
 八正道極度  
 十惡人不往  
 無為於睡樂  
 放逸少樂不折  
 三學士覺世亦八苦八  
 十惡なり時佛學よ  
 了わるる辭りして



意味深くその言  
 承けて諸人の為に  
 説く要なり故に  
 任解を餘くその  
 修のころは正し  
 乃の小端より學ひ  
 りしんバ海を界に  
 知る事なれば終に  
 専長の人あり終に  
 吾為都に  
 此れまじ  
 の祥なり

室戸語教書  
 卷之四  
 三三書房





敬老如父母

愛幼如子弟

敬てまゐるものゝ如く  
 老てまゐるものゝ如く  
 愛してまゐるものゝ如く  
 幼てまゐるものゝ如く  
 孝悌の道は  
 父母の老幼を  
 敬愛するに  
 在りて  
 己の老幼を  
 敬愛するに  
 在りて  
 孝悌の道は  
 父母の老幼を  
 敬愛するに  
 在りて  
 己の老幼を  
 敬愛するに  
 在りて











愛敬をわく人々をよむ  
 うらみの敵あんなの文  
 ねにあらはれていさむ  
 の菓を彫りあまるを  
 さらしてまはひ首八人に  
 觸れて害をまはれ  
 ちり一氣の強てきれ  
 たるにを精采をお  
 桐の端にきて葉扶持  
 とく号け摘殺さんと  
 すふ保計を修む  
 一旬日を修む  
 静かこした  
 めいりく初るで



秋のまはれ  
 のごころいんや人  
 にあはくまやにを  
 以て人にむまこ  
 とくまに人あり  
 不仁をひてむま  
 講をよここ  
 ふに者あり  
 わるがゆへふ  
 化者  
 秋







おのれが世にた  
 欲<sup>ニ</sup>達<sup>ニ</sup>已<sup>ニ</sup>  
 せん<sup>ニ</sup>あらずれば  
 身<sup>ニ</sup>者<sup>ニ</sup>  
 先<sup>ニ</sup>令<sup>ニ</sup>達<sup>ニ</sup>  
 他人<sup>ニ</sup>  
 遠<sup>ニ</sup>く<sup>ニ</sup>世<sup>ニ</sup>に<sup>ニ</sup>た  
 う<sup>ニ</sup>く<sup>ニ</sup>あ<sup>ニ</sup>ら<sup>ニ</sup>ず<sup>ニ</sup>  
 立<sup>ニ</sup>身<sup>ニ</sup>する<sup>ニ</sup>こと<sup>ニ</sup>なり  
 名<sup>ニ</sup>を<sup>ニ</sup>影<sup>ニ</sup>さ<sup>ニ</sup>す<sup>ニ</sup>  
 他人<sup>ニ</sup>の名<sup>ニ</sup>を<sup>ニ</sup>影<sup>ニ</sup>さ<sup>ニ</sup>す



飽<sup>ニ</sup>く<sup>ニ</sup>し<sup>ニ</sup>て<sup>ニ</sup>は<sup>ニ</sup>祥<sup>ニ</sup>なり  
 飽<sup>ニ</sup>叔<sup>ニ</sup>ハ<sup>ニ</sup>管<sup>ニ</sup>仲<sup>ニ</sup>也<sup>ニ</sup> 薦  
 め<sup>ニ</sup>徐<sup>ニ</sup>廣<sup>ニ</sup>ハ<sup>ニ</sup>孔<sup>ニ</sup>明<sup>ニ</sup>也<sup>ニ</sup> 進  
 孔<sup>ニ</sup>明<sup>ニ</sup>ハ<sup>ニ</sup>龐<sup>ニ</sup>統<sup>ニ</sup>を<sup>ニ</sup>す  
 む<sup>ニ</sup>是<sup>ニ</sup>皆<sup>ニ</sup>修<sup>ニ</sup>人<sup>ニ</sup>を<sup>ニ</sup>達  
 せ<sup>ニ</sup>し<sup>ニ</sup>む<sup>ニ</sup>る<sup>ニ</sup>もの<sup>ニ</sup>なり  
 己<sup>ニ</sup>も<sup>ニ</sup> 己<sup>ニ</sup>も  
 己<sup>ニ</sup>も

言部言部言部  
 三書房



智者ハ已欲立而立人己欲速而速人愚人ハ人の非を語りて己を文ふ  
 人疾繼に太公望のいづく欲を他人先須自ら傷人之語是を自傷  
 言血噴人先汚自ら人の悪半をかりて人をそとなふハ口に血をふ  
 くんく人に吐かざるごとく一人より先に  
 己のむさく汚りにたつてゐることもあなり



實語教書本  
 卷之四  
 九 三書





見他人之愁  
 即自其の患  
 亦他人之喜  
 只自共可恨

人の愁を思ふはかき人のよき言を  
 思ふはよき言の解ありきもの  
 世に人のあはれあはれ人のあはれあはれ  
 こい人のあはれあはれあはれあはれ  
 てあはれあはれあはれあはれあはれ

實語放書本  
 卷之四  
 十三書房



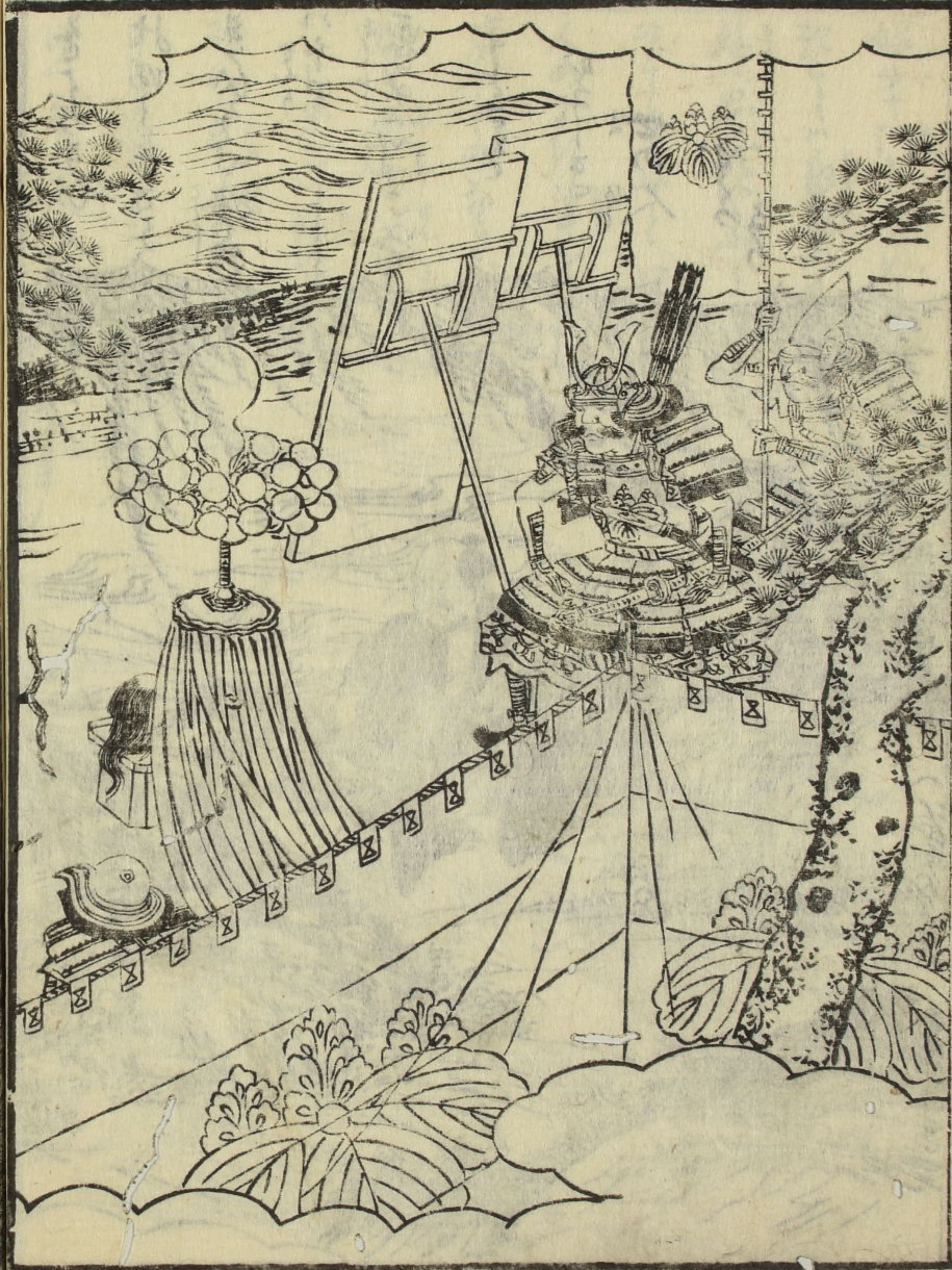
好半門をぬびとよ  
 だてておのまなす  
 外(ぞ)びのやうて  
 のまなすのり  
 人のよれやをさう  
 こぶのまなすか  
 かり要半を里を  
 さうさうの何のも  
 ぞやそ人のあ  
 ゆるり人の好



をよるこい人  
 北の  
 まい  
 八千里を  
 悪さ八門を  
 せの人  
 まり







見善者速行  
見悪者忽避

善者ハ速ク行キ  
悪者ハ忽チ避ケル

善者ハ速ク行キ  
悪者ハ忽チ避ケル  
善者ハ速ク行キ  
悪者ハ忽チ避ケル





小若も様屋すまや一いちふ  
 悪もあくひひそそななれ  
 とハとハおお入入ののちちー  
 りり雀すまや一いち羽は  
 泥ど船やう一いち足つひの  
 板いた生なまもものの世よ  
 のの族うぢろろのの終はらるるの  
 々々々々痛いたままるるこころろ  
 ななれれ博はく奕やくすするる  
 人ひととと平ひらけけハハ交まじをを  
 繩なまくく固かたむむ



みみ成なりりてて  
 且まとと交まじれれむむ  
 自みづかららのの心こころ  
 ともとも悪あくのの  
 様やうろろのの世よをを  
 善ぜんをを  
 おおいいままいい  
 悪あくをを  
 々々々々



修善者

蒙福

譬如

鄉音應

立音

音響ハ



榊木

此道

男

修

て

善

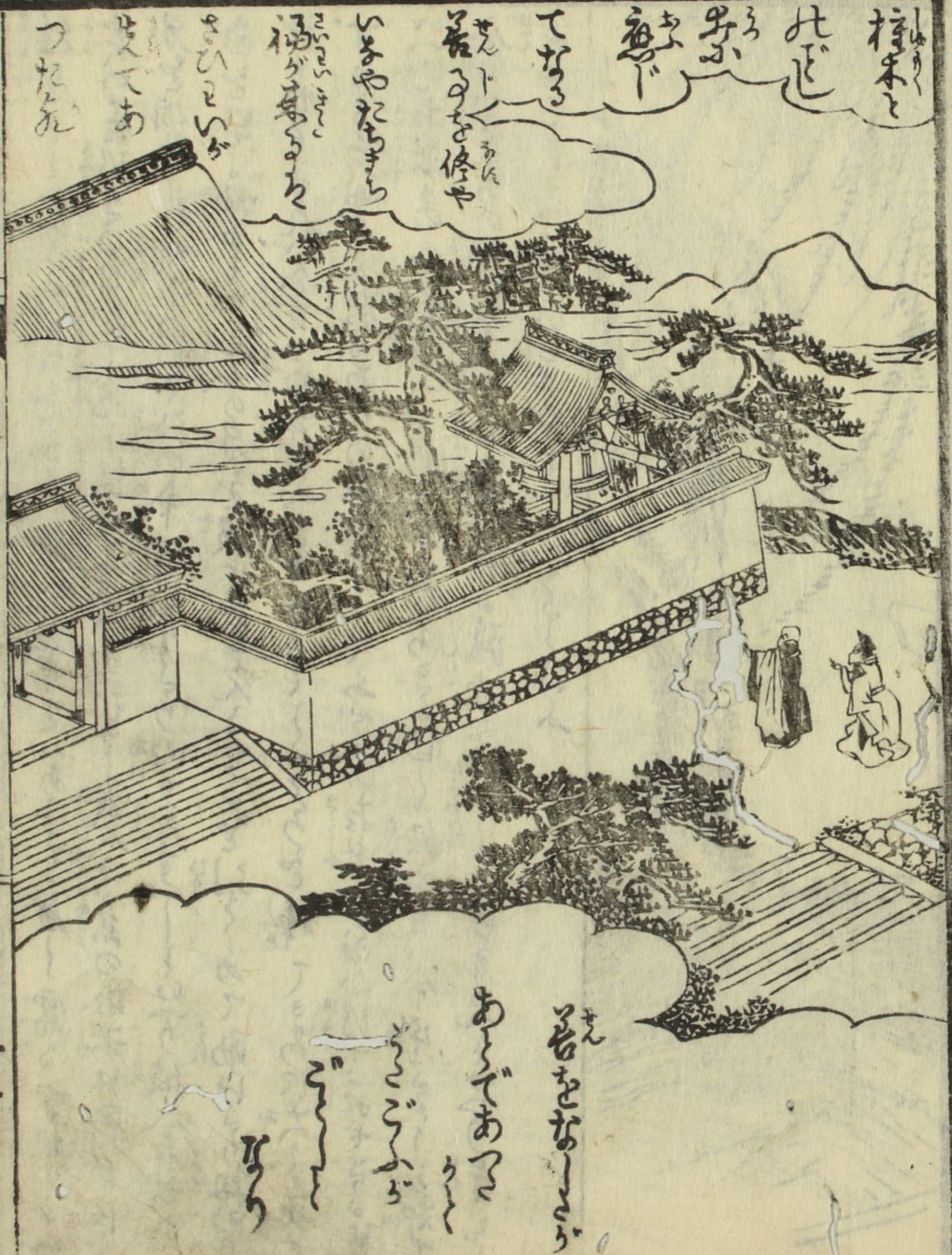
修

善

者

蒙

福



つた

三書

十四

善を修む

て

善

者

蒙

福

譬

如















